

あれども、最も良く好く競技の氣分を感じ得るものは、競技者其人なることは否認すべくもあらず。故に吾人は、平和を論ずるに最も適當なる時機如何を知らんが爲めには、親しく現戦争の氣分を感じ且つ其真相を知了するを必要とすと思ふなり。

余は、足下が本論の如き研究の第一條件として考察すべきは、交戦國の軍事上の地位如何にあらずして、其精神作用如何にあることを看過せられたりと思ふ。足下は、グレー子爵及びベートマン・ホルウエヒ氏の最近の聲明の類似せる點あるを見て、雙方共に満足すべき定式に達するの望みあることを述べたるも、吾人の見る所を以てすれば、獨逸宰相の平和演説は獨逸の勝利を背景としての平和の念に據りて鼓吹せられたるものなりとす。従ひて獨逸國民が、英國外相の所謂平和演説を以て、是れ亦均しく聯合列國の勝利を以て平和を結ばんとの念より發

したるものなりと思意するも敢て怪しむべきにあらざるなり。兩相の何れか一方にして、勝利の念を去り、又は服從の念、乃至勝敗なしの戦争の考を以て本問題に對するに至らざらん限りは、平和を論すべき適當の時機は到來せざるなり。目下に於ては、英國にても、將た又獨逸にても、斯る事情の徴候だも是れあらざるなり。

戰因は今尙ほ問題たり。

足下の説を綜合するに、足下は今日戦争の原因に關する問題を論議するを無用なりと云ふも、吾人は、之に反して、苟も多少の希望を以て平和の問題を考量せんとせば、戦争の原因より研究するを必要とするのみならず、是れ實に已むを得ざるものなりとするものなり。吾人の考ふる所にては、現戦争は一種の陰謀に其端を發したるものにして、此陰

謀は奥國のセルビアに送りたる最後通牒を以て其極點に達したるものなり。セルビアにして、此最後通牒を容れんか、是れ其國を滅ぼすものなり。該通牒の發せらるゝに先ちて、維納駐劄の獨逸大使は、確かに其要求條項を承知し、且之に承認を與へたりしなり。思ふに、獨逸皇帝も亦之れに與りしならむ。該通牒の目的は他なし歐洲の平和を破りてまでも、獨逸の野心を貫徹せんとするにあり。獨逸は、戰爭を以て領土獲得上止むを得ざる弊害なりと見做せるのみならず寧ろ之を以て推奨すべき手段なりとしたり。セルビアの征服、白耳義の中立侵犯は、斯くの如き虚妄癡惡なる政略の論理的結果なりしのみ。吾人は未だ獨逸が此陰謀を悔いたるの事實を知らず。獨逸が眞に之を悔ゆるか、若しくは其之を悔いざるが爲めに自ら悲惨の境に陥らざる限りは、永續的なる眞正の平和は到底見込なきなり。

吾人は又貴説を綜合するに、足下は目今交戰國の動機を論議すること不可能なるが故に、一先づ獨逸も吾人と等しく理自國に在りと信じつゝあるを認むるを以て足れりとせざるべからずとするも、吾人を以て之を見れば、獨逸が理自國に在りと信するの一事は却て、彼をして益暴惡ならしむる所以にして、其過を悟るの時に到りて、初めて吾人は恆久的なる平和を論ずるを得べし、何となれば恆久的なる平和は獨り軍事上已むを得ざるに由るにあらずして、道德律の教ふる所を承認實行するに基づくものなればなり。目下獨逸は毫も斯くの如き悔悟の徴候を示さざるなり。

足下は一方に於ては獨逸も今や、到底勝利を制する能はざるを覺知せざるべからざると同時に、他方に於て聯合列國も亦最後の勝利を制せんが爲めには殆ど戰敗に異なる所なき慘憺たる犠牲を要すべきを

覺知せざるべからざるが故に、平和を考量すべき時機は正に到來したりと爲すも、吾人は之を以て未だ平和の行程の半途にも達せざるものと思ふなり。獨逸が、其必ずや敗北せざるべからざるを知るの時、若しくは、聯合列國が、戦争繼續の爲めに被るべき災禍は其戦争の目標たる主義の勝利を以てするも、到底之を償ふ可らざるを感ずるに至りたる時にあらざれば、單に利害損得の打算に基づける平和すらも期待すべき適當の時機到來せざるなり。然るに、何れの交戦國に於ても尙ほ未だ上述の如き結論を甘受せんとするが如き徵候毫も是れあらず。

今日戦争を終止するは有害徒勞なり

足下の説を總括すれば、足下は戦争の進行既に久しきに亙りたるも、交戦國の期待したる目的に於て何等の結果をも生ぜず、只測るべから

ざる慘福を來したるに過ぎざるが故に、須らく之を中止せざるべからずと爲すも、吾人は今日迄の所、現戦争が未だ確然たる軍事上の結果を生ぜざるの故を以て、却て之を中止すべきにあらずと考ふるものなり。吾人は、既に多大の苦辛と犠牲とを拂ひながら、一事一物をも證定することなく、今日徒らに不確定なる平和を以て、此戦争を終止するは實に徒勞なりと思ふ。此徒勞たるや實に妄誕とや云はん、有害とや云はん、救ふべからずとや云はん、許すべからずとや云はん、盲目とや云はん、斯くの如きは吾人は一瞬時たりとも、之を考慮するを欲せざるなり。吾人は、斯くの如きの平和を以て、死者を賣り、生者に不忠實に、政府の權威を侵害し、公々然として無政府の不法を敢てし、故意に愛國の大義を破り、宗教の聖訓考をまでも蹂躪するものなりと思考す。

足下は、假令聯合列國にして充分に勝利を制し得んにしても、全然敵

を撃碎するの要なく、或は蓋し、之を敢てし得ざるべきを理由として、今日を以て、平和を論ずるの好機なりとす。されど、勿論吾人の中にも、苟も歴史に通じ、戦争及び其結果とに關して、人道的見解を有する者は、獨逸を殲滅して帝國として、存在せざらんことを冀ひ、又は之を夢想したることなしと雖、吾人は實に獨逸の政治上の理想を破壊し去ることを冀ひ、又之を夢想したり。何となれば此理想たるや、現に見る如く、文明開化と人類一般の禍社とは、武力の支配と壓迫に依りて確保せらるるものなりと云ふ思想に基づくものにして、其當然の結果として小國民の自由を蹂躪し、世界を獨逸化せずんば已まざるものなればなり。然るに、交戦二年有半の今日、獨逸は未だ、此理想と絶てるの兆なく、從ひて萬國民の對等權利を認むべき基督教の主義の上に立つべき平和の到り得べき形跡は未だ是れあらざるなり。

足下は、是れ以上の苦痛を忍びて戦争を持續するは、益交戦列國の感情を亢奮せしむるのみにて、歐洲將來の平和に有害なるべしとするも、吾人は、之に反して敵味方共に、未だ干戈を收むるの時至れりと云ふべからざる中途に於て、戦争を終熄せしむるは、却りて雙方に休養の機會を與へて、更に反目を新ならしめ、戦争を再發せしむるの途なるや疑ひなしと思ふなり。何となれば交戦國雙方共に、未だ戦争の非を悔いざるのみならず、之を遂行するの無効なるを感ぜざればなり。

足下は、假令獨逸にして、忌むべき攻勢者たりしとするも、既に時局に就きて學ぶ所ありたるを以て、若し今日に於て平和の克復するに會せば、必ずや向後全力を盡して戦争を回避するに至るは期して待つべきなりと思惟するも、吾人は、之に反して獨逸の今日迄に學び得たるは、只事實上の教訓に過ぎず、即ち敵の實力勇氣及び資源をば餘りに過小視

したりとの教訓を得たるに過ぎずと思ふなり。思ふに平和持續の安
全なる唯一の保障は、獨逸が人類の福利増進の手段として戦争の無用
なる所以の道德的教訓を悟るに在り。然るに、吾人の知る限りに於て
は獨逸は未だ此教訓に就きて學び得たる所なきなり。

何故に戦争は繼續せざるべからざるか

余の見る所を以てすれば、足下は今日平和克復を見んか、交戦列國雙
方共に、國際紛争を處理する手段として、戦争の愚なる所以を認め、共に
之に就きて學ぶ所ありて、相提携して戦争の再發を避くるに至るべし
と考ふるものゝ如し。

吾人は、之に反して、交戦國が戦争の愚なるを認むることは、敵味方の
雙方が、全然疲弊の極に達するに及びて初めて之を期し得べき所なれ

ば従ひて此教訓は、交戦國外の諸國、例へば米國の如きにありて初めて
價值あるに過ぎずと思ふなり。而も米國は斯くの如き教訓を要せざ
るや疑なし。思ふに世界は戦争の爲め多くの地方が零落湮滅して荒
廢に歸したる光景を見て、初めて戦争の無用愚劣なる所以の眞義を十
分に了解するならん。さあれ、戦争の齎らせる極度の破滅が如何に慘
憺怖るべきものなるにもせよ、其苦痛は精神的奴隸の屈辱の比にあら
ず、而して戦争に依りて此屈辱を免るべしとせば、戦争の慘禍も吾人の
此屈辱を懼るゝ感情を動かす能はざるなり。吾人の間には極めて少
數なりとも、有望なる平和案に反對して、戦争の慘苦を長からしむるが
如き言辭を弄する者斷じて是れなし。然れども聯合國列國に屬する
吾人は却りて戦争を惡むの念頗る深きが故に、之を一氣に終止せしむ
るの希望より、今日之を繼續せんとするに外ならず。目今、我が最良の

血と脳髓とが日々戦場に於て慘憺たる犠牲と爲りつゝあるを見て吾人の心血正に迸りつゝあるが故に、甚だ冷酷残忍の言ながら、吾人の心血は尙ほ繼續して迸らざるべからずと感ずるなり。又吾人は右の如き情念を以て文明の最高利益若しくは吾人の信仰と毫も抵觸する所なしと信するなり。

吾人は、吾人の全心を擧げて、正義なりと信するものゝ爲めに、奮闘するに當りて、吾人の主張に關する問題の解決を正義と沒交渉なる暴力に訴ふるの止むなきに至りたるを痛切に思念して傷心に堪へず。吾人は、吾人の宗教に於て基督が戦争を呪咀したること、又基督教にして勢力を得るに至らんか、戦争も終に終熄するに至るべきことを説くを知る、又同時に吾人は、戦争も時ありては人間の悪性を抑制する爲めに必要にして、事を權力に訴ふるは、正義の力盡きたるの時なれば、正道の

爲めならば、戦争も敢て不可なく、又之を繼續して可なるを知るなり。殊に近時に於て痛切に之を感ぜざるを得ざりき。聯合列國に屬する吾人が、一九一四年八月に於て、止むを得ず現在の戦渦に加入するに至りたるは、實に之に基因す。

歐洲を震撼したる大戦争は、既に二年有半を過ぎて、無数の士卒を白骨と化し、幾百萬の婦人小兒をして、空しく悲境に泣かしめつゝあり。而も、吾人にして、單に一時の便宜の故を以て毫も其非を悔いざるの敵と和を講ずべしとせば、其結果果して如何なるべきや。吾人は其結果唯一あるのみなるを思ふ。即ち歐洲列國の政治上に於ける一切の道徳律は悉く破れ、世界に於ける神の支配なる信仰は全然地に墜すべきこと是なり。

合衆國に對する信頼

吾人は合衆國が從來常に平和を監視し、又現に之を監視しつゝあるを深謝す。従ひて、吾人は慘憺たる戦渦の局外に立てる此世界的一大雄國が戦争終止の可能なる時至らば、直ちに立て、其提議を爲すの途に出づべきを確信し、枕を高くして眠ることを得るなり。

之と同時に、吾人は、亞米利加が現に採りつゝあり、又將來とも繼續して採るなるべき其態度に満足を表して、安心しつゝあるものなり。即ち其態度たるや、交戦國の孰づれにも與みせず、唯、人道の友及び擁護者たるにあればなり。合衆國の大統領は、頃日、人類の大部分の福利に影響すべき戦争に際して、中立を維持するは、向後大國に取りて不可能なるべしとて、熱情の満々たる宣言を發したるが、是れ實に吾人を以て之

を見れば米國が開戦の曉に其人民をして採らしめたる氷の如き嚴正中立よりして一大躍進をなしたるものと云ふべきなり。

是れ敢て新説にはあらざるも、一大提唱なり。曾て大英人オリヴァー・クロンウェルが、英國をして曾に世界の最強國たらしめたるのみならず、又其最も名譽あるものたらしめたるは、此の主義に外ならず。されば、吾人より見るも正邪曲直の別を無視し只殺人及び隷従の二語を以て稱するの外なき戦闘法正に復活しつゝある今日に於て、米國が如何なる方面を非難するに關せず、毅然として萬古不易なる人道の大法は、決して之を犯すを許さずといふ崇高なる主義を固守して渝らざるを多とすべきなり。是れ、實に、正義の精神をして世界に生命を存せしめ、やがて平和の日の到來を促進するに與りて力あるものなればなり。

ホール・ケーソン

第二 コスモスよりホール・ケーンへ

一九一六年十一月二十七日

ホール・ケーン君足下。

紐育タイムズ社の好意に依り、余は十一月二十五日附の足下の電文に速答するを得んとす。足下は余の議論の目的とする所を全く誤解したり。此誤解は、余の議論が不完全に、或は部分的に足下の許に達したるに起因したるや疑なきも、一部は本論が公にせらるゝに際し、米國及び其他に於て、戦争の終結に關する意見の發表少からざりしが故に、余の説が不當にも是等の諸説と混同せられたる事實にも歸因すべし。又余の説を印刷するに際して附したる標題も、誤解を惹起したる一因ならんか。

余は敢て即時に平和を定むべしと論じたることなし。之に反して、余は却りて夫の戦の大目的を抛棄してまでも、單に人道上より、即時の平和を主張する人々若しくは其運動とは全然關係を絶ち居るなり。戦争の大目的にして達せられざる限りは勿論、假令既に達せられたりとするも、尙其將來に向ひて確保せられざる限りは、此戦争は、平和の名を値すべき終結を見ること能はざるなり。斯くの如き事情の下に於ては、唯軍備競争の新時代を現出し、新に絶望的なる奮闘を生じて、人間の智力の及ぶ限りあらゆる手段を弄して、將に來らんとする、今回と同じく戦慄すべき第二の抗争に對して有利の地位を占むるに汲々たるの結果を見るに過ぎざるのみ。

余が立論の出發點は、先づ獨逸及び其同盟國の必敗を前提として、現戦争が、合衆國をも參加せしむべき國際的協定を以て、遠からざる將來

に於て終止せしむべきを考量すべき時機到來したりとの信念にあり。余は、斯くの如き國際的協定を論ずべき基礎を定むるの目的を以て、紐育タイムスに寄書して若干の提案を提出して之を研究したり。されば、是等特別の提案を熟讀翫味して、現在の如き災禍の再發を防ぎ、文明の擁護に任せん爲め、人力の爲し得ん限りを盡すの目的を以て、將來の國際的協定を論ずるに當り、如何なる點まで其基礎として用ふ可きやを指摘するを得ば、益する所少々ならざるべし。

足下は、是等の論文を以て、戦争に依りて刺激せられたる感情より超然たる不利の境遇の下に起草せられたるを免れずとなすも、是れ實に誤れり。余は、努めて斯る感情の余の議論中に露はれざらんことを期したるも、余の感情頗る深きものあるを以て、是れ實に難事なりき。今次戦争に於ける聯合列國の大義に感動せざらん程のものは、到底永續

すべき平和の條項を論じて貢獻するの資格なかるべきなり。

コ ス モ ス

第三 ホール・ケーンよりコスモスへ

一九一六年十一月二十九日倫敦にて

コスモス君足下。

紐育タイムス社の好意に依りて、余は月曜日の足下の電文を一讀したり。然るに當地刊行の貴論の摘要に依りて吾人の知れる足下の論文の本旨と該電文とは全然相違せり、是れ余の直に足下に告げんと欲する所なり。即ち該摘要は、足下の論文を以て獨逸の爲にもせられ、或は少くとも、一轉して獨逸の利益に供し得んが爲めに揚げられたる平和の紙鳶たらしめしも、余の書翰は、貴説を迎ふるに斯る惡意の解釋

を以てしたるものにあらず。否、却りて英國の輿論の責任ある一機關紙が眞摯なる一論客に對し、且つ戰時以來他國に於て曾て其比類を有せざる最も高明にして研究的なると同時に、深き同情同感を示せる幾多の論文を掲載したる紐育タイムスに關して、斯くの如き不穩の語を用ひたるを悲むの情に動かされたるなり。

余の書翰は又、平和の運動を起すに當り、物質上より見れば明かに不利なるを顧みず、最も尊崇すべき人道の大義に據りて動き得べきは、獨り合衆國のみなるの明白なる事實を認めて之を傳へしが爲めなりき。

故に余は、軍事上の機會乃至は必要等の如き理由に依らず、専ら道德律の大道に立脚して足下に答ふるが爲めに最善の力を致し、屢足下の用語を引用したるも、唯足下の立論の要旨に戻らざる以外、敢て揣摩臆測を加ふることなかりき。是れに依りて、余は我國民の精神を代表し

得たりと信ず。我國民は米國の所爲に向ひて、敢て感謝の情を忘るゝにあらず、又我國民は今日自ら平和の語を用ひんことを欲せざるにせよ、中立國中の最偉大なる米國に向ひて斷じて「平和」の文字を封じ去らんことを求むるが如き僭越を敢てするものにはあらざるなり。

されど、足下にして、若し英國人が往々米國に加ふる言辭に就きて不満なる所以を感ずとせば、余は足下に向ひて、姑らく身を吾人の位地に置かんことを乞はんとす。勿論獨逸人が悉く倨傲武斷の貴族にもあらざるべく、普魯西人が悉く横暴なる匈奴にもあらざるべし。英國にても、暴慢倨傲なる威嚇の用ひらるゝこと獨逸に於けると異ならざるものあるべし。戦争に依りて生じたる無限の慘苦の下に呻吟しつゝある者多き中に於て、平和の提案に對する罵々たる反對の叫びが、或は好戰的なる説教壇宗教家より、或は悲壯の氣に充つる長椅子(貴婦人)よ

り、或は勇氣當るべからざる安樂椅子(老人)より發しつゝあるは、英國に於ても將た又敵國に於ても同様なるものあらん。然れども必ずしも之を以て全體を推すべきにあらざるなり。

我英國民たる、勇敢にして氣慨ある自尊の人種なり。彼等は、未だ敗戦に慣れず、従ひて其屈辱を忍ぶことを欲せざるものなり。勿論、吾人は往時にありて、暗澹たる慘苦の時代なかりしにあらず。一時、世界的霸權を振ひたる後、和蘭艦隊が勝に乗じてテムス河畔に侵入し來りしは、今より三百年に満たざる以前のことなりき。吾人が、最も赫々たる勝利を得つゝありし後、間もなく我軍が海に陸に破滅の難に遭ひしは、是れ亦二百年に満たざる往時のことにてありき。

さあれ、吾人の國民的精神は、曾て破れたるをなく、又吾人は、未だ曾て屈辱的平和に叩頭したりしとなし。然も、吾人の信する所に據れば、吾

人は今や卑劣殘忍なる陰謀の犠牲となりつゝあり。吾人は今や、我同盟列國は勿論、米國をも含める若干の中立國と共に、無道野蠻にして初めて計畫實行し得べき誦詐極りなき戰鬪の慘害に苦しみつゝあるものなれば、吾人は平和の實際近きに迫らざる限り、之を喋々すべきにあらずとの感を有するものなり。而して吾人は之を以て正當なりと思ふ。

敵國が之に就きて喧噪するは、其勇氣に出たると恐怖に出たるとを問はず、放任して可なり。之に就きて喋々するは吾人の精神にあらず、其沈黙を守るが爲めに拂ふべき犠牲如何は、問ふ所にあらざるなり。是れ實に我國民法の第一義にして、此事を知らざれば我英國を談すべからず、即ち英國の今日如何、又如何にして今日あるに至りたるかを知らる能はざるなり。

我國人中にても大新聞紙を通じて、連日若くは毎週其意見を一般英

人に告ぐるを以て當然の義務と爲しつゝある者は、此潜在せる國民性に就きて痛切なる意識を有するに至りたり。今日我國民が未だ問題の範圍に入りたりと認めざるが故に吾人の論じ得ざる題目あり、又我國民が未だ可能の範圍内に達したりと信ぜざるが故に、吾人の考量し得ざる事件なり。而して、是等の題目又は事件とは他にあらず、即ち要するに平和の問題にして、今日に於ては、其時機未だ熟せず、従ひて不名譽にして危険なりと爲すなり。本問題に對しては、吾人が過去、現在及び將來に互りてあらゆる慘禍に苦しむに拘らず、我帝國魂は、激怒しつゝあり。是れ米國の所謂平和談に對して、英國が忍ぶべからずと爲し、時に猜疑を以て之を見ることある所以にして、又貴説の如くに、平和の範圍及び目的に關して、往々誤解の行はれたる所以なりとす。

余の電受せる貴書の要旨に對しては、余は滿腔の同意を表す。本戰

争にして、正當の終結を告げたらん時、願はくは上帝速に之を實現せしめよ、此の如き災禍の再發を防ぎ、文明を擁護するの目的を以て國際的協定を創設する爲めに努力せざるべからずとの提議は我國人の大多數を擧げて贊同する所にして、而して又全世界に大なる權威を有し、全然現戦争の罪惡に關係なき米國の如き一大國が率先して、此崇高なる大事業を指導するは、吾人の適當にして正當なりと認むる所たるなり。然れども、吾人が足下の平和同盟に加はりたりとて、徒に幻想に囚はるべきにあらず。吾人は、之を以て、必しも基督教の祖師の唱道せる平和の主義を促進せんとするものなりと思意すべきにあらず。大多數の人々の理解する所に據れば、基督教の主義は、暴行は如何なる形式に於て使用せらるゝも暴行を誘致するものなれば、道德律の世の中を實現せしむべき唯一の法は惡に抵抗せざるに在りとの主張に基づける

なり。

然れども、吾人の見る所を以てすれば、此主義を以て殉教者と宗教とをこそ作り得べけれ、國民を作ること能はず、而して足下の所謂國際平和同盟も、威力を以て其基礎とせざるべからざるものなり。此同盟や最後の手段として、背後の権力に依頼するものたること、一國の内政と其軌を一にすべく、從て時に或は行詰りあり、破裂あり、現狀に比すれば微小なるべきも幾分の危険の襲來は免れざるべきなり。

然るに、吾人は足下の平和同盟の背後に存する威力は一國の威力にみらずして、世界的威力たるの相違を認む。此相違たるや、蓋し根本的たるべく、斯くて吾人は、左の數事の實現を期すべき理由を有するに至るべし。即ち國際紛争に際して、道德律の實行を期し得べきが故に、奥國のセルビアに對して發したるが如き最後通牒の不可能とならんと

是なり。小國民の權利は、之を強制すべき權力とは別なるものと認めらるゝが故に、白耳義の中立を蹂躪し、其人民を隸使するが如きことは將來考へ得ざるに至らんこと是なり。而して殊に重要なるは、智能の格別人に拔んずるなく、若しくは卑劣なる動機を懐くの譏を免れざる少數者の祕密に處理せる亂醉外交の混迷數日にして、忽ち巨億の生民を塗炭の苦に陥らしめ、吾人の現に其渦中にあるが如き世界戦争は斷じて再び行はれ難きに至らんこと是なり。

若し米國にして、時到りて、斯る列國の連衡を形成し得るに至るとせんか、是れ實に人類に對し、世界が未だ曾て期し得ざりし大功を奏するものと云ふべし。斯くの如き有難き經過の終極は殆ど吾人をして刻下の慘憺たる戰亂の齎らせる無量の悲境に對して自ら慰むる所あるに至らしむべし。何となれば之れに依りて吾人は、上帝が曾て大洪水

を以てしたりし如く、今や鐵火の烈威に依りて世界の最も不淨なるものを一掃せんとせるは、此理に據るものなること、又上帝は如何なるものをも無用ならしめず、辛苦犠牲も敢て無意味たらしめざること、又上帝は時世の盛運と悲痛とに依りて此落魄の世界に光榮ある復活を附與するに至りたることを感知するに至るべければなり。願はくは上帝之を納れ給へ。

ホール・ケーン

第四 コスモスより批評家へ

一九一六年十二月一日

紐育タイムズ記者足下。

交戦國たると中立國たるを問はず、各國が希望する永續すべき平和

の基礎如何に關し、余が目下タイムズ紙上に掲載しつゝある議論を批評し又は推奨せる幾多の書面足下の手を通じて送致せられたるが、右は正に受領せり、由りて茲に、簡單に之に答ふる所あらんと欲す。

余は先づ余の議論の前提とする所の要旨を再説せん。即ち其前提とする所は、先づ聯合國が、中歐列強に對し、軍事上及び經濟上の勝利を制すること、次に、聯合列國をして第一に其戦争遂行の目的を成就確保せしめ、第二に、將來再び今次の如き大争亂の勃發を豫防する爲め人力の及ぶ限りの條項を網羅すべき國際的協定締結の見込の確實になるに至るまでは、飽くまでも戦争を繼續せしむべきこと是れなり。

余の議論は主として米人に對して述べたるものなり。何となれば余は之に據りて戦争の眞目的並に講和條件の起草せられん際、是等の目的を貫徹確保すべき手段方法に關し、合衆國の輿論をして明細に了

解する所あらしめんことを望みたればなり。合衆國は、中立國として現戰爭に参加するものにして、獨り戦場の勝敗のみならず政治思想及び政策上に於ける結果に關して、直接に至大の關係を有するものなり。勿論余は是等の議論が歐洲に於ても相踵で起り、目下吟味中の根本問題に關しては、合衆國の人心と歐洲の人心とが、少くとも或程度までは相一致するに至らんことを希望したるが、今や歐洲に於ても同様の議論起りつゝあり。

余は、又反復して言はん、余の議論は、即時の平和を主張する獨逸最員の運動の爲めに述べ且つ刊行したるものにあらず、又無勝負を基礎として速に戰爭を終止せしめんとする米國、又は他の諸國に於ける團體又は運動とは、直接にも、間接にも、全然、無關係たるなり。此種の團體と運動が著しく衆目を惹きつゝありし際に於て、余の議論が印行せられ

たるは、偶然の事なるが、而も不幸なりき。

余は又注意までに、余に書を賜りし諸君にして、余の議論を批評し又は推奨するに先ち、之を精讀するの勞を吝むなからんには、更に一層満足し喜びに堪へざるべきことを一言せん。

コ ス モ ス

第五 「コスモスの論文」

十二月十八日發行「紐育タイムス」紙論說

今朝の我タイムス紙上に其結論たる第十六章を掲げたるコスモスの連載寄書に依り、吾人は劍戟相撃つの間、に於て道理の聲を聞くを得たり。氏の論題は戰爭終局の後に於て、永續すべき平和の根柢とすべき條件如何に在り。氏の特長とすべきは、刻下の戰爭を誘致せる原因

たる利益の競争、政治上の不調和、及び誤れる理想を確實に了解せるにあり、而して氏の結論は、此戦争が將來の戦争を防止すべき保障手段を胚胎するものたらざるべからずと云ふ深き信念と正義觀とより出でたるものなり。

コスモスの論文は、之に對する若干の批評を招きたるも、更に大に世論を喚起したるものにして、是れ、蓋し、永續すべき平和に缺くべからざる戦後の調節法の大綱を遺漏なく豫言したるものなり。

第九章の劈頭に於て、氏は其平和にして永續せしむべきものなりとせば、其平和の基礎たらざるべからずと思意する諸條件を再述して曰く、「上來述べたる所に據りて、何づれの國家も其の大小を問はず、皆自由に發展し得べき保障を有すべきこと、國際貿易上門戸開放の政策を採ること、戦時禁制品以外、海上に於ける私有財産の拿捕又は破壊を禁止

すること、アルサス、ローレンを佛國に返還すべきこと、將た又露國のダ
ルダネルス及びポスフォラスの占領を認むること等、凡べて戦争落着の
方法に關する大要を網羅したり」と。

此外、尙ほ、戦争の他の目的あり。アスキス氏は、之に就きて、英國は普
魯西の軍國主義を殘す所なく全滅するの事業を完うせざる限り、其輕
輕しく抜かざりし劍を鞘に收むることなかるべしと言ひたるが、此軍
國主義たるや、コスモスの所謂「普魯西の心理状態」にして、是ぞ獨逸をし
て軍國的國民たらしめたる所以なれ。右の外、尙ほ獨逸よりは白耳義
に、埃太利よりはセルビアに、其與へたる損害に對して賠償せざるべか
らざるの件あり。

氏の論文の末段なる結論の部に於ては、列國が戦争防止の爲めに持
久的保障を樹立せざるべからざる件、世界全局の平和を確保すべき萬

國の同盟を結ぶ件、國際紛議の原因を調査すべき審査委員會に關する規定の件、又は國際裁判所設立の件等に關して、頗る博大なる見と明晰なる識とを以て立論し、其の目的とする所と其前途に於ける困難とに就きても論述遺す所なし。殊に列國の協定をして好果を奏せしむるが爲めに拘束するを必要とする制裁及び強制に關する手段方法の性質を論じ、又合衆國がモンロー主義及び歐洲の政局より脱離せる傳統的方针を體して、安全に採り得べき當然の任務を論ずるに當りては、其所説玲瓏透徹の趣あり。又我合衆國民竝に各州に對して苦言を呈し、若し彼等にして國家的義務及び國家的奉公の眞義を覺悟するに至らずんば悔ゆるも及ばざるべきことを警告したり。是れ實に米人の悉く肝に銘すべき所なり。

我タイムス社は、是等の寄書をコスモスに徴して之を公刊するに當

り、社會の爲めに、大に貢獻する所ありたるを感ぜざるを得ず。思ふに戰後、平和の條件にして、其種類と、結果と、畫案とを悉くして、實際問題として論評せらるゝの時に會せんか、我社の微功も亦、從ひて、顯著なるに至らんか。コスモスの提唱したるは、單に條件條項に止まらずして、實に根本の主義にあるなり。

附 録 終

大正六年十一月八日印刷
大正六年十一月十一日發行

正價金八拾錢

不許複製

譯者 煙山專太郎

發行者 荒川信賢
東京市小石川區香取町四丁目十一番地

印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區櫻町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區櫻町七番地

發行所

東京市牛込區早稻田
振替東京二二三番

早稻田大學出版部

所 捌 賣

東京神田
東京日本橋
東京京橋
東京東區
大阪東區
名古屋市

東京堂
至誠堂
北隆館
東海堂
盛文館
星野文星堂

(肆書地各他其)

362
43

.. 70

.. 50

終

